

キャリア開発学科の地域貢献フィールドワーク — 活動と課題 —

岩田京子 藤島淑恵

Department of Career Development's Community Contribution Fieldwork: Activities and Issues

Kyoko Iwata Toshie Fujishima

(2022年12月12日受理)

1. はじめに

中村学園大学短期大学部キャリア開発学科（以下、本学科）は、教育課程のなかに「フィールドワーク分野」、科目として「フィールドワークⅠ・Ⅱ」（演習科目、各1単位）を設置している。当初は、学生の自主的な学外活動等に単位を認定することを想定していたが、近年は学外活動をより積極的に推進し、単位認定者も増えている。また、本学科のフィールドワークは地域社会、企業、海外の大学とのつながりで成り立っており、単に教育活動であるにとどまらず、大学（学科）による社会連携・社会貢献の意味合いも強い。

これまで、藤島&岩田（2021, 2022）において本学科のフィールドワークをテーマに実践報告と考察を行ってきた。本研究においては、客観的分析ツール（BEVI）を使った本学科学生の心理的傾向の分析結果、実践報告に加え、フィールドワークの課題についてまとめる。なお、本稿で扱うフィールドワークは、ボランティア・地域貢献を主とした学外活動である。

2. 本学科のフィールドワークの背景 — BEVI から見る学生の特徴

BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) は、1990年初頭にアメリカの臨床心理学者 Craig N. Shealy によって開発された心理尺度を測るオンラインテストである。185のテスト項目があり、所要時間は約30分程度と言われている。結果データは、7つ領域 (domain)、17のスケールに分けられている。Aggregate Profile (全体プロフィール) は、17のスケールそれぞれで、全体平均値が100点満点で表され、50ポイントを平均としている。Consistency (一貫性) と Congruency (適合性) は、

結果の妥当性の指標で、7割から8割の点数があることが望ましいとされている（東矢&當間2019, 2020）。事前(T1)と事後(T2)で受検をして、それぞれのスケールで5点の差があると有意性があるとみなされる。

バイサウス&池田（2020）は、BEVIを「人が学習や成長、発達のための経験に参加する前に『その人がどういった人なのか』を把握し、また、ある経験の結果として『その人がどのように変わったか』を、さらにこうした因子がどのように相互作用して学習、成長、発達または変化の可能性を高めた（また低めた）か、を理解しようとするものである」とし、人間の「総合プロファイリング」と表現する。

総合プロファイリングをする BEVI は、短期海外研修（永井2018など）やオンライン協働学習（COIL）の成果測定（清藤&橋本2020、バイサウス&池田2020など）に使われてきた。それらの学習では語学力の向上以外、いわゆる人間的な成長を測定することが求められたからである。最近では、BEVIはオンライン授業での効果測定（大西2021）やビジネス系科目での成果測定（岩田2021）にも使われている。学生が答えるアンケート調査やレポートだけでは、客観的に成果を測定したとは言い難い、という多くの教育関係者がもつ課題に BEVI が応えている。

本学科の学生は、令和3（2021）年度入学生（以下、21H生）から、新入時の4月に BEVI を受検している。中村学園（以下、本学）が BEVI の法人契約をしているため、追加料金が発生せず何度でも受検が可能であるという利便性がある。また、新入生の傾向を見ること、入学後のさまざまな活動の評価や教育課程の改定などにも客観的データのひとつとして使用できる。

まず令和4（2022）年度入学生（以下、22H生）の BEVI の結果を見ていくことにする。図表1は全体プロ

フィール (Aggregate Profile) である。「7 基本的な決定論」と「14ジェンダー的伝統主義」に注目する。基本的決定論は適度に低い方がよいとされているが、高い数値である。またジェンダー的伝統主義も高い数値になっている。また、「15社会文化的オープンさ」「16生態との共鳴」「17世界との共鳴」も低い値で、こちらも21H生の数値とほぼ同じで、中央値にも届かない。

図表2はデシルプロフィール (Decile Profile) で10段階の各得点範囲に入る回答者の割合が示されている。「7 基本的な決定論」には7割以上が8~10に集中している。あいまいさを嫌い、白か黒か、yes-noの単一の答えを好む傾向がとても強いことがわかる。「14ジェンダー的伝統主義」も8~10の間に4割が集中する。固定化された性別役割に疑問をいだかない学生が多いことを示している。「15社会文化的オープンさ」も1~3で6割強である。さまざまなことに進歩的であるかの指標だが、この数値からも学生の保守性がわかる。

そうした保守性は、「16生態との共鳴」や「17世界との共鳴」(さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる)にも関連しているだろう。前者は、1~4で7割、後者は6割を占めるが、「世界との共鳴」では1と2で4割に達する。15と17だけでも、22H生が保守的で、さまざまな他者との交流に積極的でないことがわかる。

22H生の前年、21H生も入学時にBEVIを受検しているが、22H生と21H生のデシルプロフィールも全体プ

ロフィールも実によく似た傾向を示している。21H生のデータから「物事を伝統的、固定的に考える傾向が強く、積極的にさまざまな人々や文化に触れることに及び越しの消極的なタイプの学生が多い」(藤島&岩田2022)と示唆されている。2年間のデータではあるが、一定程度は、この傾向が本学科学生の特性を表していると言ってよいだろう。

このような全体的な特徴をもつ学生たちに、少しでもさまざまな人々との出会いや、社会、文化について考える実践的な機会を提供し、そこから学び・成長を促すのが、本学科のフィールドワークの目的である。

3. 本学科のフィールドワークの実践

ここでは、現在、本学科の学生が参加している2つ地域貢献のフィールドワークを報告する。

(1) 地域猫活動

地域猫活動とは、飼い主のいない猫による糞尿や鳴き声などの問題を地域の環境問題として捉え、地域住民の合意のもと、住民活動者(活動グループ)が主体となって、不妊去勢手術や一定のルールに基づいた餌やり、トイレの管理などを行うものである⁽¹⁾。去勢により猫は増えず、一代限りの命を守り、将来的に野良猫をゼロにするのが目的である。また、去勢することで発情期の鳴き声やケンカの減少や、一定のルール下での餌やりとトイ

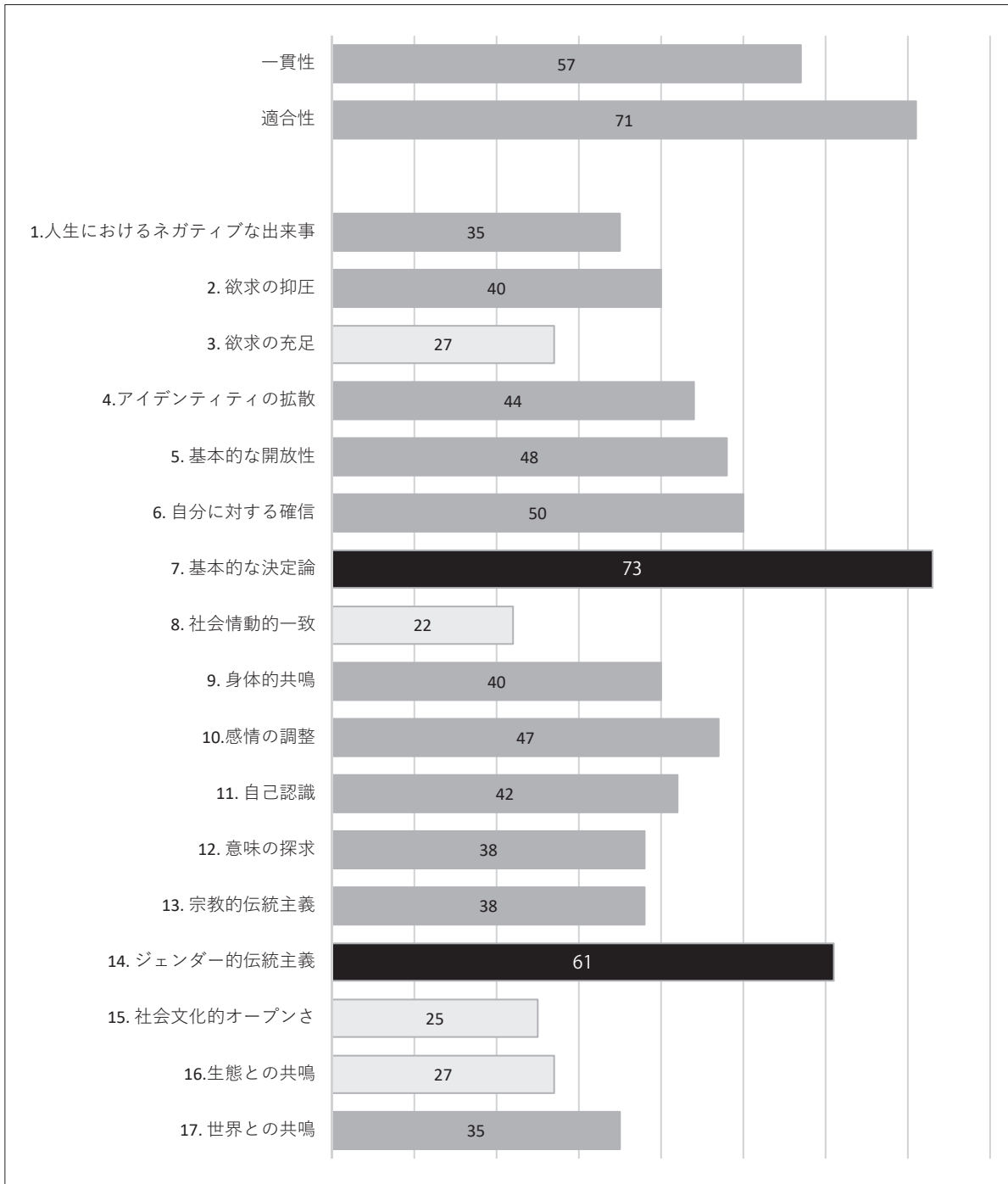
図表1：キャリア開発学科(22H) デシルプロフィール

N=133

Decile	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
一貫性	0%	0%	0%	7.52%	13.53%	29.32%	31.58%	14.29%	3.01%	0.75%
適合性	0%	0%	0%	0.75%	3.76%	12.03%	21.05%	33.08%	20.3%	9.02%
1. 人生におけるネガティブな出来事	7.52%	25.56%	15.04%	9.77%	10.53%	9.02%	6.77%	10.53%	1.5%	3.76%
2. 欲求の抑圧	6.02%	21.8%	12.78%	9.77%	7.52%	14.29%	10.53%	4.51%	7.52%	5.26%
3. 欲求の充足	22.56%	24.81%	12.78%	7.52%	8.27%	5.26%	7.52%	5.26%	5.26%	0.75%
4. アイデンティティの拡散	6.02%	16.54%	9.02%	13.53%	3.01%	15.79%	9.77%	10.53%	7.52%	8.27%
5. 基本的な開放性	12.78%	12.78%	6.02%	9.02%	17.29%	7.52%	8.27%	2.26%	9.02%	15.04%
6. 自分に対する確信	5.26%	9.77%	18.05%	10.53%	9.02%	7.52%	11.28%	9.77%	9.02%	9.77%
7. 基本的な決定論	0.75%	3.76%	4.51%	3.76%	3.76%	3.76%	8.27%	18.8%	28.57%	24.06%
8. 社会情動的一致	36.09%	18.8%	15.79%	4.51%	5.26%	5.26%	6.77%	3.76%	3.76%	0%
9. 身体的共鳴	11.28%	13.53%	10.53%	9.77%	15.79%	15.04%	10.53%	6.77%	2.26%	4.51%
10. 感情の調整	7.52%	11.28%	11.28%	12.03%	16.54%	5.26%	10.53%	11.28%	8.27%	6.02%
11. 自己認識	15.04%	15.04%	15.79%	6.02%	5.26%	8.27%	6.77%	7.52%	12.78%	7.52%
12. 意味の欲求	16.54%	15.79%	14.29%	6.77%	7.52%	9.02%	7.52%	9.02%	8.27%	5.26%
13. 宗教的伝統主義	3.76%	13.53%	3.76%	25.56%	14.29%	19.55%	11.28%	5.26%	1.5%	1.5%
14. ジェンダー的伝統主義	1.5%	7.52%	5.26%	7.52%	6.02%	12.78%	18.8%	12.78%	18.8%	9.02%
15. 社会文化的オープンさ	20.3%	25.56%	15.79%	9.02%	10.53%	6.02%	3.01%	8.27%	1.5%	0%
16. 生態との共鳴	20.3%	11.28%	21.8%	18.05%	9.77%	3.01%	5.26%	2.26%	6.02%	2.26%
17. 世界との共鳴	21.8%	20.3%	7.52%	11.28%	10.53%	3.76%	13.53%	3.76%	7.52%	0%
Decile	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

図表2：キャリア開発学科(22H) 全体プロフィール

N=133



レ管理で、ゴミ漁りや糞尿被害の削減が期待できる。

地域猫活動の問題点として「猫が好きな人による猫のための活動」との誤解があり、地域猫活動に反対する住民が存在し、自治会の活動として認められにくいことがあげられる。福岡市では「地域猫活動」の認可を受けると去勢手術の費用は、市から助成されるが、手術は愛護センターの予約が必要なため、捕獲から手術まで時間が空く場合の猫の保管、センターまで運ぶ手段と費用が活動者の負担となる。さらに、日々の餌代、病気や怪我の

治療費も活動者の自己負担である。野良猫に餌をやる「餌やりさん」が存在するが、地域猫活動への協力には否定的な傾向がある。

本学科では令和2（2020）年12月より、福岡市中央区T地区の地域猫活動に協力している。学生による猫の捕獲や継続的な世話は難しいため、地域住民に地域猫活動への理解を得るための活動を行っている。具体的には、住民活動者との打合せ、チラシ、アンケート、ポスター作成を学生がする。チラシの裏面をアンケート用紙

とし、対象地区にポスティングすることで、アンケート調査を行った。これまでにポスティングは3回行っている。第1回目は野良猫の状態を把握するため、地域猫活動を申請したT地区1丁目の戸建て住宅約300戸を対象とした。しかし戸建て住宅以外も猫の被害はあつこと、2丁目にも猫の行動範囲は及ぶことから2回目と3回目は1、2丁目の全世帯約1,400戸を対象とし、2回目は野良猫の被害、3回目は未去勢の野良猫の状況と「餌やりさん」について調査を行った。

活動に学生がかかわるメリットとして、地域住民との利害関係のない分、自治会や反対派の方に「話を聞いてもらいやすい」ということがあげられる。今後はアンケート結果をもとに、自治会との話し合いや住民の説明会を検討しているところである。

また、対象地区に限らず、地域猫活動を知ってもらうためにSNSを活用し、サイト、Facebook、インスタグラムを開設した。さらに説明動画や手づくり紙芝居の制作を行った。活動資金を集めるために、バッチ、雑貨などの制作販売をし、令和3（2021）年度は2万円強の利益を寄付し、令和4年（2022）年度も物品販売を行っているところである。

(2) プレイパーク

プレイパークは「冒険遊び場」とも呼ばれ、日本で始まったのは昭和48（1973）年にさかのぼる、50年近い歴史のある活動である。特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会は、令和3（2021）年に「冒険遊び場は、すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共につくり続けていく、屋外の遊び場である」⁽²⁾と定義している。一般的には子どもたちが遊びを作り出すことのできる遊び場を提供したり、極力禁止事項をなくしたり、自分の責任で遊ぶことを大切にしている活動である。

本学科が実施しているプレイパークは「子どもが外で遊ぶ機会を増やす」「地域の憩いの場、交流の場を提供することで保護者同士のネットワークを拡大し、子ども会等の発展の手助けをすること」の2つを目的に開催している。大学近隣で自治会等からの依頼で引き受ける、あるいは本学科から開催を調整依頼している。

これまで3回開催した。令和3（2021）年3月20日谷緑地、5月20日鳥飼公園、8月27日西町公園である。また、別団体の主催するプレイパークへの出店、学内で開催した講演会でのキッズコーナーの運営、地区の夏祭りでの出店も行っている。学生の活動内容は、遊びの企画から準備、当日運営、片付けまでの全般に及ぶ。学生が段取りを考えて行う経験が、実社会でのビジネスで活か

されると考えられる。

上記2つのフィールドワークはいずれも活動場所は大学に近く、学生による地域貢献活動である。学生が地域社会へ出て行くことは、社会との接点を持ち、地域の課題に目を向ける好機である。特に、BEVIを通して本学科学者が世界や社会へのまなざしが弱く、保守的で、さまざまな他者との交流に消極的傾向があることがわかっていることから、地域社会（住民）との接点をもつ機会を提供し、学生の参加を促すことの意味は大きい。一方で、フィールドワークの教育効果をさらに高めるためには、教育プログラムとしての精緻化が求められる。

4. 課題

本学科の地域貢献のフィールドワークを進展させるための課題をまとめておきたい。

(1) ボランティア学習とサービス・ラーニング

長沼（2015）によると、日本で最初に「ボランティア学習」を提唱したのは、1982年に設立された現在の日本ボランティア学習協会である。1980年代初頭からボランティア学習が提唱され、主に初等・中等教育において推進された。1995年阪神・淡路大震災後の復興ボランティアが契機となり、1990年代後半になって大学の教員や実践者がボランティア学習に参加し始めた。一方、「サービス・ラーニング」（以下、SL）は2008年以降、教育行政の推進もあり、実践や研究が進んでいった。日本の教育的文脈にSLが位置づけられるようになったのは1990年代後半からであるが、その成果が広く共有され認知されるのは2008年以降ということになる（長沼2015）。

ボランティア学習とSLは類似のものとして扱われ、ボランティア活動やインターンシップと混同されやすいが、これらと大きく異なる点として、カリキュラムに統合されている、奉仕をする側とされる側は互恵的関係である、構造化された省察する時間（リフレクション）を設けているといった特徴がある（馬場&倉本2022）。長沼（2015）は唐木（2010）を引用し、サービス・ラーニングを成立させる必要条件は、(1)プロジェクト型の学習（課題発見、分析、解決の一連の学習プロセス）、(2)リフレクション（振り返り学習、振返り）、(3)カリキュラム統合（教科を中心とした学問的カリキュラムにサービスを統合する理念及び方法）であると言う。端的に言えば、問題解決の学習過程、振り返り学習、アカデミックな学びとのリンクである。

まとめると図表3のようになろう。ボランティア活動は純粋に奉仕が目的で、学びや振返りは、自然発生的に

起こる場合もあるが、基本的に必要はない。一方、ボランティア学習は学びを目的とした活動で、活動後のリフレクションが必要とされる。SLはそれに加え、アカデミックな知見とのつながりがあることが求められる。サービスの内容が教育目標や目的に合致し、学習者がサービスをすることで目標や目的を達成でき、新たな学びや行動へと結びついていくことがSLということになる。

長沼は「ボランティア学習の方が（SLより）広範な理念である」という。ボランティア学習のなかでも、特にアカデミックな知見とむすびつく活動をSLと呼んでいると解釈できる。SLについては、山下他（2021）「サービス・ラーニングは、学生が地域社会などのニーズに応える貢献活動（サービス）に取組、振り返り（リフレクション）を通して、学習目標と結びついた学び（ラーニング）を得る経験学習」の定義がわかりやすい⁹⁾。

本学科のフィールドワークが、ボランティア学習なのか、SLなのかを分類することが目的ではない。より重要なのは、活動にプロジェクト型の学習、つまり学生が課題発見、分析し、解決までのプロセスを踏んでいけるように授業設計や活動設計ができるか、である。

また、リフレクションの時間を確保することが重要だろう。リフレクションは批判的思考力を育成するのに効果的と言われている。本学科の学生が深く考えるよりも単純な答えを好み、伝統的、保守的な傾向があることから、特に行動の広がりや思考を発展させる振り返りをいかに学生に促すかが、大きな課題である。

図表3：ボランティア学習とSLの違い

	プロジェクト学習	リフレクション	カリキュラム統合
ボランティア活動	×	×	×
ボランティア学習	○	○	×
サービス・ラーニング	○	○	○

(2) フィールドワークを支える専門的組織と人材

赤澤（2010）は、全国の大学のボランティアセンター（以下、VC）の実態調査を行った。少し古いデータではあるが、2010年2月現在で、133大学・短大118か所設置されていた。設立のきっかけは、ボランティア元年とも言われる1995年の阪神・淡路大震災からが多い。その後、2002年「青少年の奉仕活動・体験活動等推進施策について」、2003年度からの文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」や「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」、2008年度からの「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」という教育政策面の後押しが続いたことが設立の背景にある。

VC設立の目的は、大学が学生の学びや人間的成長を

促すための教育的な支援、もうひとつが、大学による地域（社会）へ責任を果たすためのボランティア活動の支援である。赤澤（2010）によると、VCの大きな業務は、(1)「情報収集提供活動」（地域から寄せられるボランティア募集情報を受け付け、学内開示版での掲示やメールマガジンでの発信、ボランティア説明会等のイベントでの情報提供など、様々なツールを利用して発信する事業）、(2)「ネットワーキング活動」（VC運営を円滑に進めるために地域の機関や組織と交流・連携する事業）、(3)「資源提供活動」（活動スペースや備品、資金の提供など、学生個人や学内のボランティア団体が活動するための環境整備を行う活動）、(4)「学習支援活動」（ボランティアにかかわる学び、「ボランティアについての学び」「ボランティア活動に参加するための学び」「ボランティア活動への参加を通じての学び」）がある。

そして、(4)「学習支援活動」を実践するのが、(5)「プログラム開発・運営活動」（ボランティア活動を含んだプログラムを実施する事業）で、プログラムの位置づけ（正課・課外）や「事前事後学習の有無」「期間」活動を軸とするため受け入れ先との連携や役割分担が必須である。プログラム開発・運営活動は、大学VCが有するネットワークやノウハウ、専門性が要求される高度な取り組みである。

組織としてのVCだけではなく、そこで働く専門的人材も重要である。木谷（2002）は、ボランティア学習の課題として、(1)大学当局と教員の意思統一、(2)ボランティア学習の位置づけを大学でどうするか、(3)大学入学前の高等学校などでのボランティア学習と大学との関連、あるいは継続性をどう考えるか、に加えて、(4)ボランティアコーディネーターの育成システム開発を挙げている。ボランティアコーディネーターが学習に欠かせない存在にもかかわらず、その育成方法は手探り状態である。

馬場&倉本（2022）は、サービスラーニングコーディネーターについて分析している。コーディネーターによる記述から、教育参画においてコーディネーターだからできることは、(1)地域との連携、(2)存在・機能、(3)学生指導、(4)業務的対応範囲であるという。コーディネーターは学生にとって親しみやすい身近なアドバイザーやコンサルタント的存在である。コーディネーターの地域社会へのかかわりに対する態度は、地域パートナーと良好な関係を構築するうえで必須の資質・能力と位置付けられている。コーディネーターの参画はSLを豊かにするが、コーディネーターそのものが少なく、また、いたとしても教育参画の割合が低い。

現在、本学には赤澤らが言うボランティアセンターのような組織は存在していない。学生のボランティア活動を経済的に支援する「Nプロジェクト」はあるが、「情

報収集提供活動」「ネットワーキング活動」はボランティアセンターを有する大学ほどには活発ではない。実際、上述した本学科のフィールドワークは教員の個人的つながりや紹介などが発端となり始まったものである。ボランティアセンターの役割にもなる「プログラム開発・運営活動」を教員がほぼひとりで担っている現状がある。

赤澤、馬場&倉本や木谷らが言うように、ボランティアスタッフ（サービスマネジメントコーディネーター）などの専門的人材の存在は欠かせない。教員の負担軽減、それ以上にボランティア学習やSLの教育効果を高めるためにも、そして本学が学生のボランティアを通して地域（社会）貢献を志向するのであれば、組織的バックアップ体制が強く望まれる。

5. まとめ（今後の展望）

本稿では、BEVIによる本学科学生の保守性や消極性という特徴を、フィールドワークを通して改善する実践を報告した。今後も本学科はフィールドワークを重要な教育方法として考え、改良を加えながら積極的に実施をしていきたい。BEVIで成果を測ること、またBEVIから見える学生の課題を発見し、新たな教育プログラムを開発し、教育課程の改定にもつなげることが今後の展望である。

フィールドワーク、特に地域課題解決型の活動については、ボランティア学習やSLとして効果があることは、多くの研究結果からわかっている。その効果を最大化するためにもリフレクション（振り返り）が欠かせない。これまでの振り返りを再度検証し、学習効果を高めるためのプログラムとしたい。また、今後、フィールドワークを活発化させるためには、専門性をもつボランティアスタッフ（コーディネーター）の存在が大きいことがわかった。本学のようにスタッフ（コーディネーター）が不在の場合の「コーディネーター的役割を果たす人材」、あるいは組織をどのように創出するかは現実的課題である。スタッフ（コーディネーター）の役割や資質はどのようなものかを検討することは、今後の研究課題としたい。

オックスフォード大学、マイケル・オズボーン教授らが発表した論文 *The Future of Skills* のなかで、2030年にアメリカで必要とされるスキルの第1位に「戦略的学習力（Learning Strategies）」が挙げられている。戦略的学習力とは“Selecting and using training/instructional methods and procedures appropriate for the situation when learning or teaching new things.”（「新しいことを学ぶあるいは教えるときに、状況に適したトレーニング/指導方法や手順を選び実践できるこ

と」）とされる⁽⁴⁾。自分にどのようなスキルが必要か判断でき、その習得に最適な学習方法を選び取れる力である。また、第10位には「アクティブラーニング（Active Learning）」能動的学習が入っているのも注目できる⁽⁵⁾。

近年のデジタルトランスフォーメーション（DX）などで仕事の上で必要とされる新たなスキルを習得する「リスキリング（学び直し）」が強く言われ、企業は学び直してデジタル人材の育成に熱心だ⁽⁶⁾。国も「人への投資」（学び直し支援）に力を入れ始めた⁽⁷⁾。

DX、その他の科学技術の進歩、感染症や災害などの予期せぬ社会状況の激変などが想定でき、もはや、人々は学校教育で身につけた知識や技術だけで、職業人生あるいは人生100年時代を乗り切ることはできない。誰もが一生学び続けることになる。とすれば、学校教育で最低限、学生が身につけなければならないのは何なのだろうか。それは、積極的に「新しいことを学ぶ」という姿勢・態度、そして、その手段としての学習方法を適正に選択する力であろう。

コロナ禍でオンライン教育が大学に普及してきた。大学の授業以外にもさまざまな良質のオンライン教育素材（例えば、Moocs/Mooc、JMooc、gacco など）が提供され、世界中の人々が参加し学んでいる。学生がリスキリングの重要性を理解し、在学中から多様な学習方法を認知することは必要だろう。学生の戦略的学習力の育成に学習方法の多様化にも目を配りたい。本稿で扱ったフィールドワーク（ボランティア学習、SL）も若い学生が地域や世界を知るといった経験だけにとどまらず、卒業後の生涯学習でも有効な学習方法として昇華させることも展望できよう。

注

- (1) 福岡県「始めてみませんか！地域猫活動」<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/communally-owned-cat.html>
最終検索日 2022/08/31
- (2) 特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会「冒険遊び場の定義」
<https://bouken-asobiba.org/news/detail-746.html>
最終検索日 2022/08/31
- (3) 他の経験学習（ボランティア活動やインターンシップなど）との違いは山下他（2021）に詳しい。
- (4) *The Future of Skills Employment in 2030*
<https://futureskills.pearson.com/research/assets/pdfs/technical-report.pdf> p.42
Hasan Bakhshi Jonathan M. Downing Michael A. Osborne
Philippe Schneider
最終検索日 2022/08/21

- (5) 第2位から9位は順に、心理学、指導力、社会的洞察力、社会学・人類学、教育学、協調性、独創力、発想の豊かさ、である。
- (6) 学び直し3年休職制度 日鉄、博士号取得を後押。日本経済新聞。2022/08/15, 朝刊
デジタル人材10倍2500人に 旭化成 学び直しで育成など。日本経済新聞。2022/08/17, 朝刊
- (7) 人への投資に1100億円 厚労省概算要求 学び直し支援へ 拠点。日本経済新聞。2022/08/23, 朝刊

引用・参考文献

- 赤澤清孝 (2010) 「大学ボランティアセンターの現状と課題 全国における大学ボランティアセンター実態調査より」『大学と学生』2010年3月号 35-43
- 岩田英以子 (2021) 「本学におけるビジネス系科目受講者への BEVI の実施について」『神戸松陰女子学院大学研究紀要』第2巻 1-15
- 大西好宣 (2021) 「表現系オンライン授業の効果測定 - 国際的心理テスト BEVI の導入」『人文公共学研究論集』第43号 95-108
- 河井亨 (2012) 「ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか - 全国大学生調査の分析から -」『ボランティア学研究』Vol.12 91-101
- 河井亨・木村充 (2013) 「サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割: 立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて」『日本教育工学会論文誌』36 (4) 419-428
- 木谷宜弘 (2002) 「高等教育機関におけるボランティア学習の意義と課題」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』7巻 14-29
- 木村充・河井亨 (2015) 「サービス・ラーニングにおけるチームワークが学生の学習成果に及ぼす効果」『ボランティア学研究』Vol.15 87-97
- 清藤隆春・橋本智 (2021) 「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定 - コロナ禍でのグローバル人材育成の試み -」『高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要』2020巻 12-21
- 永井敦 (2018) 「BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析 - 「グローバル人材」は育成できるのか? -」『広島大学留学生教育』22 38-52
- 長沼豊 (2015) 「日本の教育的文脈における Service Learning の意義とこれからの展望 - 既存のボランティア学習との関連から -」『ボランティア学研究』Vol.15 5-15
- 西谷元 (2017) 「留学効果の客観的測定・プログラムの質保証 - The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j) -」『広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書』137 45-70
- バイサウス・ドン・池田佳子 (2020) 「国際教育実践の学習効果測定の手法の一考察 - COIL Plus プログラムにおける BEVI の活用 -」『関西大学高等教育研究』第11号 131-136
- 馬場洗志・倉本哲男 (2022) 「サービス・ラーニング コーディネーターによる教育参画の意義についての研究」『教育デザイン研究』第13巻 170-178
- 福原充 (2018) 「大学教育における社会連携の一考察 - 立教大学におけるサービスラーニングに注目して -」『キリスト教教育研究』No.35 113-132
- 藤島淑恵 (2022) 「地域貢献活動が短期大学に及ぼす効果の可能性 - フィールドワークの活動を通して -」『秘書サービス接遇教育学会第28回研究大会研究発表要旨』P6-P8
- 藤島淑恵・岩田京子 (2021) 「フィールドワーク活動における ICT 活用の可能性」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第53号 151-155
- 藤島淑恵・岩田京子 (2022) 「キャリア開発学科「フィールドワーク」の展開 - BEVI を新たな視点にして -」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第54号 137-143
- 藪田里美・山口洋典 (2013) 「地域参加型学習におけるコーディネーターの素養群 - 大学生の異世代交流拠点でのアクションリサーチから -」『ボランティア学研究』Vol.13 53-67
- 山下美樹・宇治谷映子・黒沼敦子・藪田由己子 (2021) 『サービス・ラーニングのためのアクティビティ』 研究社
- 和栗百恵 (2015) 「サービス・ラーニングとリフレクション: 目的と手段の再検討のために」『ボランティア学研究』Vol.15 37-51